

## 第1報 飼育し使って分かる純血サツマビーグルの魅力

徳島県 久米 稔

### 1. はじめに

当犬舎が心血を注ぎ保存・普及活動をしている純血サツマビーグルも本年度で3年目となり、やっと軌道に乗って来た感がある。この3年間と言う短い期間ではあるが、飼育、繁殖、保育、育成、猟野訓練、狩猟等を通じて、過去に知りえなかった多くの知見を深めることが出来た。しかし、未だに純血サツマビーグルから色々と教えられることも多く、同犬の約100年に及ぶ先人の思い（品種改良）が身に沁みる毎日である。

今日までサツマビーグルは、小生も含め「名前は聞いたことがあるがどのような仕事をする猟犬なのか知らない」と言う方が多いと思う。また、狩猟雑誌等にも分譲紹介欄等には登場するが、同犬の特性等については殆ど報告されたことが無く、未知の犬種として一部の愛好家に飼育されて来た。

今回、同犬の保存普及に一石を投じるべき、当犬舎が所有する純血サツマビーグルにおける調査研究の結果を以下に報告する。

#### 【お断り】

本記事はあくまでも当犬舎の純血サツマビーグルであり、全てのサツマビーグルに当てはまらないことを承知の上でご覧を願う。

### 2. 特徴

#### ① 体型

- ・外形：バセットハウンド並みの大きな絞り耳、均整の取れた筋肉質の胴体と四肢、ピンと立った尻尾が特徴。
- ・毛質：標準は短毛で密（やや長いものもいる）。
- ・毛色：標準は白・黒・タンの三色（黒・茶の斑点が入るものもいる）。
- ・体高：43～50cm、体重：15～20kg。
- ・体臭：少ない（アメリカンビーグルの様な特異な体臭は全くない）。

#### ② 性格

- ・非常に利口で賢く、従順で温和である。
- ・日本犬によく似て、主人に忠実である。
- ・尻癖が良く清潔感を好む。

- ・非常に警戒心が強く、他人が屋敷内に入ると二三声鳴くが、無駄鳴きは一切しない。そのため1才を過ぎて購入すると約3日間餌を食べないものも少なくない（朝夕の運動を通して信頼をさせる事が秘訣）。
- ・1才を過ぎる頃から独立心が芽生え、他犬との共猟を好まなくなる。
  - ※ 他犬（ハウンド等）とのグループ猟には不向きであり、あくまで単独猟で使用すべきである（シカの単独猟には最高の犬種と言える）。

### ③ 猟芸

- ・捜索は、主人との連携を保ち、半径約30～50mを漂臭と足臭を上手く使い分ける。臭いがなければ一旦主人の元に戻り指示を待つ。
- ・越しは、足臭より漂臭を多用するため非常に速い。
- ・追跡は、高速と中速を上手く使い分け、良く響く大声の連続鳴きで追跡（30～90分）した後、主人の元に帰ってくる。
  - ※ シカの単独猟では、シカの特性である起されると寝屋を中心として1～2回ほど円を描きながら逃げる間の約15分間が最大のチャンスとなる。またその後は入水（走り焼けた身体を冷やすために谷や川に入る）しながら遠走りし捕獲に繋がらない場合が多いことから、60分以内の追跡で主人の元に帰るのが理想と考えている（今後の系統繁殖の目標）。

## 2. サツマビーグルが絶滅寸前の危機になった理由

本犬を、アメリカンビーグル、プロットハウンド、ブルーチェックハウンド、ウオーカーハウンド等と同じ犬種のように考えている方が、単に『サツマは帰りが良い』等と言う安易な情報から購入（飼育）を考えている方が非常に多いことに驚いている。これは全くの誤解であり、上記のような考えで購入した方がサツマビーグルは捜査範囲が狭い、追跡時間が短い、パックに乗らない等々、多くの悪評が吹聴されたこと並びに同犬を愛好しているハンターの高齢化やブリーダーの不在等により今日の絶滅寸前の危機に至っていることは誠に残念で遺憾としか言いようがない。

サツマビーグルは、外見は他のハウンドと非常によく似ているが、作出過程で日本の猟野事情や生活風習等に適合した猟犬としての品種改良が行われて来た結果、その特性は全く異なっている。

小生の長年に渡る調査の結果、サツマビーグルの発祥地：鹿児島は、武の国、質実剛健で門外不出を好み、洋犬の追い鳴きと追跡能力は認めるものの、他集落までも長追したり、大声での無駄鳴き、大食、ベタベタした性格（誰でも付いていく）、尻癖の悪さ等々は受け入れがたく、約100年と言う長い年月を持ってこれらを改良し、外見はハウンドを維持し、その他は日本犬に近い特性（性格）を持たせ、捜索は単独猟で使用できるように広くなく、絶えず主人と連絡（距離）を保ちながら猟場を狩り込み、追跡は高速で効率的（足臭よりも漂臭を多用）で遠追いせず（隣

接する集落まで追跡し迷惑をかける犬は淘汰)、多くの獲物(ノウサギ、タヌキ、シカ、イノシシ等の高価な獣類)を捕獲する犬が好まれ、日本固有の獣猟犬が誕生したと推察する。

そして昭和に入り高度成長と共に狩猟もスポーツとして普及し、サツマビーグルも一部の先人により狩猟雑誌の「全猟」や「狩猟界」に紹介され、全国に知られ飼育されるようになった。しかしながら、上記した品種改良の経緯の他、同犬の詳しい特徴(体型、性格、猟芸等)も紹介(説明)されること無く、一部の利益優先とも思われる無秩序な繁殖等により同犬の猟能が低下した犬が多くなり、変わってアメリカンビーグル、プロットハウン等が輸入されるとそのF1(一代雑種)も試みられたが長続きせず(上手くいかず)、今日のような絶滅寸前の危機になったと言うのが実情と考える。

### 3. 当犬舎への質問が多い内容と解説(サツマビーグルの誤った考え方への解説)

以下の質問は、当犬舎への質問で最も多いものを抜粋したものである。

解説(私見)は、あくまで当犬舎で調査又は飼育し使って分かった純血サツマビーグルの本質を記載した。決して、売名行為や販売するための口実等でなく、本件に纏わる誤った考え方を正し、今や全国的に増加の一途を辿り農林業に甚大な被害を及ぼしているシカの駆除に本犬が貢献し、被害の低減に寄与することを目的とする。

解説のポイントは、サツマビーグルの誤った考え方(報告)は、過去にどの犬種と比較して・・・と言う根拠が全くないことである。今回は飼育経験が40年余りと長いアメリカンビーグルとサツマビーグルを比較することにした。

#### ●問1. 生後8ヶ月にもなるが猟欲も出ず仕事をしようとししない・・・。

【解説】アメリカンビーグルは早いものは6ヶ月頃から猟欲が発現し先導犬に付いて追い鳴きする犬も多いが、本犬は約10ヶ月頃から猟欲がでるものが多く、遅いものは1才過ぎるものも少なくない。

尚、本犬は体型が中型でやや大きいため身体がある程度出来た10ヶ月頃から徐々に山に引いた方が良い結果がでる。また、2歳くらいまでは猟犬として訓練に耐えると言われている(但し、効果的な訓練が必要なことは言うまでもない)。

※ 盲導犬のラブラドルレトリバーも約10ヶ月までは家庭犬としてしっかり育て、その後訓練に入ると言うことと同様に考える。

#### ●問2. 捜査範囲が狭い・・・。

【解説】サツマビーグルは、単独猟を主体に品種改良されており、主人との連携を重点に行動する(捜査範囲が広くない方がよい)ことは当然の特性であ

り、「捜査範囲が狭い」と言う評価は間違っている。これには、アメリカンビーグルや他のハウンドと比較して評価されたのだと推測するが、これらのハウンドを用いてシカ猟をすればよく理解できる。他のハウンドのように車から放すと一目散に猟野に走り、獲物の寝屋を求めてどこまでも搜索しシカを起しても捕獲はできない。

当時（明治後半）は、今日のように道路も整備されておらず無線やGPSも無い時代は犬の回収も皆無だったと思われる。一説では、薩摩全土にハウンドが普及した理由に、回収不可能なハウンドが野を超え山を越え帰れなくなり、集落に迷い込んだものに地犬を交雑し、今日のサツマビーグルが誕生したと言う説もある。この説は、かなり有力な話であり、ハウンドの猟芸（特性）を考えればよく理解できる。この交雑した犬の外見をハウンドにするか日本犬にするかは好みであり、薩摩人は前者を選択し、捜査範囲が広く、追跡時間が長いハウンドを、単独猟に適した主人を中心とした搜索範囲（犬が見える範囲）に改良したと考える。搜索範囲が狭いと猟場が簡単に変えられ、捕獲率のアップにも繋がる利点がある。逆に、隣村まで搜索し、そこで獲物を起して追い鳴きしても捕獲には繋がらず、村同士の揉め事（対立）にも発展し、決して好ましいことではない。

●問3. 追跡時間が短い・・・。

【解説】これも前記した「搜索範囲」とも大きく関連する。先ず追跡時間が長くと捕獲率が良いか？・・・を考えてみる。つまり追跡は、獲物を捕獲するための手段であり目的ではない。短い時間で効率的に追跡できるように品種改良が行われたサツマビーグルは、他のハウンドのように足臭をネチネチと追跡するのではなく、漂臭を高速又は中速でしかも大声で連続的に追跡するため、獲物が通いなれた獣道を逃げる事が出来ず、単独猟でも短時間で捕獲することができる。このことは先人（猟師）の生活を楽にさせることに繋がったと考えられる。

●問4. 他犬との協調性が無い・・・。

【解説】サツマビーグルは、あくまでも単独猟（当時は貧困で多くの犬が飼育できない）で多くの獲物を捕獲し、生活の糧とすることが絶対条件であり、現在の様な複数の犬を一度に放し猟をすると言うことは想定しなかったことから、猟場で他犬と協調（当時は邪魔と考えておりこの資質も不必要とされていた）することは好まないことから品種改良の過程で除去されたと推測される。

●問5. サツマビーグルはどの様なハンターに向いている・・・。

【解説】単独猟を好み、人犬一体となって山野を歩きつつ、自然を満喫しながら、狩りを楽しむ人にとっては最高の犬種と言える。とにかく他のハウンドには

無い、何時も主人を中心に狩りをし、何時でも帰れる又は山を変えることが出来る・・・と言うことがサツマビーグルの最大の特質と言える。勿論のこと犬探し等は皆無な犬である。

サツマビーグルは、追い鳴き等を楽しむ犬でなく、真に狩らせる犬と言え、今日増加の一途を辿るシカに対しては最高・最強の犬種と言える。また、コンパニオンドックとして、洋犬（ハウンド）は好きだがベタベタとした性格が嫌いと言う方、更には日本犬も洋犬も大好きだが2頭は一度に飼えないと言う愛犬家には好都合で最高の犬種と言える。

●問6. 現在、純血サツマビーグルの生存数（飼育数）は？・・・。

【解説】正直言って分かりませんが、調査は過去の狩猟雑誌の紹介欄（販売）に掲載されていたブリーダーへの問合せ（過去40年間）並びに当ホームページ「狩猟犬サツマビーグルの郷」へのメール情報や写真の送付等を頂いた方からの情報を基に行った（現在も進行中）。

その結果、本犬の遺伝的特性を保持し、かつ繁殖者、出生地、生年月日、所有者、所在等の情報が確かなサツマビーグルは国内で21頭、純血度が比較的高いと思われるもの10頭を含めても僅か31頭余りである。その内、今後繁殖が可能と思われるものは半数にも満たない厳しい状況にある。しかし、現在、種牡2頭に種牡候補3頭が昨年発見され、極近親交配による繁殖障害は回避されていることは心強い。現在、発祥地：鹿児島県でも本犬を使用して猟をされている方は極一部の方であり、今や本犬は一般の方がペットとして飼育されており、益々発見が難しくなっている。今後も引き続き生存情報や品種改良の経緯等について調査を継続していく。

※ 当犬舎では、全国の愛犬家からホームページ等を通じて本犬への飼育情報の提供（写真など）をお願いしているが、今日までに50件余りの情報提供があったが、詳細を確認した結果、本犬と他犬種との交雑種が大部分を占めた。しかし、地道な情報収集の結果、昨年度は絶滅したと考えていた「小型サツマビーグル」が和歌山県那智勝浦町色川村で飼育されていることが確認されたことは非常に喜ばしい。

以上、3年間の飼育経験からよくある質問等を整理し私見を加え記載させて頂いたが、今後サツマビーグルを狩猟犬として使用したいと考えておられる方は、先ず同犬の特徴をよく調査し（ブリーダーによく聞く）、自分の狩猟スタイルに合うか否かを見極めることが大切である。人の噂や流行を追い求めては良い犬には恵まれず楽しい狩猟も台無しとなる。

今後も純血サツマビーグルの飼育経験を通しての「気付き」を整理し、適時に公表することにより同犬の普及と発展に寄与して行きたいと考えている。

#### 4. サツマビーグルの効果的な訓練方法

過去に全く訓練をしていない犬（11ヶ月の牡と14か月の牝犬）を訓練したことがあるが、毎日早朝に連れ出して運動兼ねて犬任せでゆっくりと林道（車が殆ど通らない道）や谷筋を登り下りする。その間は訓練犬を信頼し、訓練犬の立場で考え、訓練犬と共に行動する・・・と言う小生の訓練信条を貫いた結果、何れも1ヶ月余り単犬でシカを起して追跡するまでに成長した。実施はこうである（ポイントは早朝に行くこと）。先ず林道等を運動がてら犬の動きに任せゆっくりと前進していく。何日か繰り返していく内に捜査範囲も広くなり、藪入りを自然とするようになる。そうするうちに山鳥等にも反応し最初の追い鳴きをする（戻ってきたらオーバーに褒めてやる）。こうなれば占めたものでしばらくは自信が付くまで同じ場所で行うことが大事。そうして何時も追い鳴きが出るようになれば猟欲が出た証拠であり、犬も山に行くことを今か今かと犬舎でそわそわし鳴きだすようになる。これが猟欲の発現と考えてよく、次第とシカが居そうな谷筋を犬に任せゆっくりと登り下りを繰り返して行くと、やがて漂臭をキャッチしその方向に興味新進で近寄っていく・・・するとシカは一目散に逃げるが最初は目で追い鳴きをするために直ぐにシカを見失うが、戻って来たらオーバーに「ヨシヨシ・・・偉いぞ・凄いぞ！」と頭や全身を撫でてやる。これを繰り返すことにより主人はシカを追跡すると喜んでくれることを理解させる。

※ サツマビーグルを入手（生後60日）してからシカ猟犬に成長する間の訓練等に関しては、ホームページ『 狩猟犬サツマビーグルの郷 』を参照。

特に、ブログ「狩猟犬サツマビーグルのアキちゃん訓練記 全10話」は必読！

#### 5. おわりに

この度、純血サツマビーグルの過去3年間の飼育・狩猟等の経験を整理し、殆ど知られていなかった本犬について情報を公開した。本犬は本当に利口で賢く、言葉は喋らないが人間そのものの様に感じる。小職も狩猟用のブーギー系アメリカンビーグルを系統繁殖し40年余りになるが、この様な犬種が他に居るだろうかとつくづく思い知らされる。

家庭では大人しく、子供にも非常に優しい。反面、警戒心が強く家族以外の者が屋敷内に入ると二三回低い声で吠えて知らせるが、それ以外の無駄鳴きは一切しない。また、犬舎内では糞尿はせず清潔感を好む。

狩猟では、主人との一体感を自主的に行き、谷筋や山道をゆっくりと登って行くと、前方の道の左右約30～50mを小走りに狩り込んで行き、臭いが無いと一旦主人の元に戻り指示を待つ・・・と言う何とも利口で賢い。そして、臭いが有ると一直線に高速でお越し追跡となる。シカの場合は起されると寝屋を中心に1～2回に渡り円を描きくが、単独猟ではこの時が絶好の捕獲チャンスとなる。

捕獲は大部分が起してから約15以内に捕獲できる。この機会を運悪く逃すと、シカの追跡が続くが、長追いはせずに約60分位いで主人の元に帰ってくる。このことは他グループへの見切りの邪魔をする等のトラブル防止しに繋がる他、他のハウンドに有りがちな獲れもしないのにどこまでも追跡し、挙句の果て「犬探し」をしなくて済む。

純血サツマビーグルとは・・・と言われたら「日本犬がハウンドの衣を纏った様な犬」と説明すると良く理解してもらえる。本犬は1才が過ぎると他のハウンドの様に協調性は無く、単独を好み、主人に忠実になる。正に日本犬と非常に良く似ている。即ち、本犬はハウンド好きのハンターよりも日本犬を好む方に向いている犬種と言える。

本犬を飼育して欲しい方は、全国的に増加の一途を辿るシカの駆除を考え、かつ人犬一体で単独猟を好まれるハンターや利口で賢く従順で温かな性格を好む愛犬家（コンパニオンドック）には最高の犬種と言える。

#### <付記>

純血サツマビーグルについて更に深く知りたい方は、インターネットで「狩猟犬サツマビーグルの郷」で検索しご覧下さるか、下記までご連絡下さい。

四国プリンス犬舎 tel:090-7787-3299 mail:mnkume@nifty.com

— 以上 —